

## コロナ禍におけるオンライン授業の実践例としての 「キリスト教の精神と文化Ⅰ（藤山担当授業）」

藤 山 修

### 序 論

本大学の前期期間の授業は、新型コロナウイルスの感染拡大に対応してオンライン授業を実施することとなり、「キリスト教の精神と文化Ⅰ」の授業はIC-UNIPAを利用して課題研究型のオンライン授業を行った。

例年、「キリスト教の精神と文化Ⅰ」は、5名が3時間ずつを担当するオムニバス形式の授業を行っている。5名の担当者の授業内容が重ならないように、他の担当者の授業内容を確認し、調整し合っている。

藤山担当の授業は、キリスト教世界観を基礎にキリスト教人生観を論じることによって、学生が自らの人生観を形成する上で参考になることを意図して行っている。青年期にある学生が取り組むべき課題を取り上げ、そのような課題にキリスト教の視点からどのように考えることができるのかを、青年期問題として自己の確立の問題、社会性の問題、自己実現の問題を設定して授業内容を展開している。

例年行っている授業内容を文章化し、課題研究型オンライン授業の授業資料として発信し、学生がその内容を読み取り、課した課題に答えるということで一回分の授業が終了するという方式で行った。いざ、例年行っている授業内容を文章化しようとしたとき、その大変さを経験した。面接授業では学生の反応を見ながら、学生の興味を引き、考えさせるように話す内容を選び、時によっては予定した内容を変更して講じていた。

課題研究型オンライン授業の授業資料として文章化したときは、学生の興味や関心を引くことを考慮し、授業内容をまとめることに苦心した。授業科目の目的を果たすべき内容を文章化することに努めた。（実質的には、例年、実際に行っていた授業内容の三分の二ほどしか文章化できなかった。）授業資料が学生が理解できる内容、読み取れる文章表現でなければ意味をなさない。前期の授業を終えた今、そのことが達成できたかが問われることになる。（※そのことの判断の一端になる学生の課題の解答例を最後の「まとめ」に取り上げる。）

さて、岡田典夫元学園総長は、本学園の教育理念が問われたとき、教育基本法の前文および第一条にある「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間」の育成を「キリスト教精神に基づく人間形成」にあるとし、「キリスト教主義学校のダイナミズム（独自性でもある）は聖書の言葉を《問いかけ》・《働きかけ》としてとらえることを出発点とし、それを受けとめ「個」として応答することによる人間形成にある」と解答していた。（岡田典夫「キリスト教主義学校の教育理念を問い直す」2005年茨城キリスト教大学紀要第39号）

まさしく、聖書の言葉に聞くことをする姿勢がキリスト教主義学校のあるべき姿であるといえるであろう。学生が本学で履修するどの教科にそのことが可能なのかと考えたとき、「キリスト教の精神と文化Ⅰ、Ⅱ」が最も可能な教科であると言えるであろう。今回、コロナ禍のオンライン授業で行った藤山担当の授業をその一例として掲載させていただく。

礼拝について追記させていただく。聖書の言葉に聞くという意味において、聖書が説かれ、語られる礼拝がキリスト教主義学校であることの欠かすことのできない根本（ダイナミズム）であるということも確認しておきたいと思う。

以下が実際に行った課題研究型オンライン授業である。

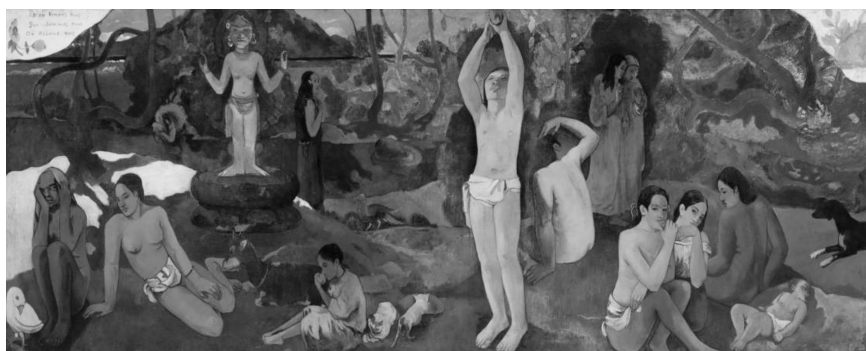
### 藤山担当授業 その1「自己の確立」の問題 キリスト教の精神と文化Ⅰ

藤山担当の授業は、青年期問題として「自己の確立」の問題（青年期問題1）、「社会性」の問題（青年期問題2）、「自己実現」の問題（青年期問題3）について、聖書（キリスト教世界観、人生観）から学ぶことが目的です。

さて、青年期は「第二の誕生」の時期であると言われます。自覚的に自我に目覚め、自分とは何か、生きる意味や目的などを考え、悩み、自分なりの価値観・人生観を形成しようとする時期です。また、価値観の多様化した現代社会に、自分を見失わず、自分らしく生きるためにも、自分なりの価値観・人生観を持つことが必要であると言えるでしょう。本授業（藤山担当授業）は、そのための参考となるべく授業を行うことを意図し、目指しています。

まず、「自己の確立」の問題について考えてみましょう。

はじめに



ゴーギャンは、その晩年に『我々はどこから来たのか？ 我々は何者なのか？ 我々はどこへ行くのか？』というタイトルの絵を描いています。画面の右下には赤ん坊が、そして画面の左下には老婆が描かれています。画面の真ん中には、エバが善悪の知識の木から取っているイメージ（旧約聖書の創世記3章）の人物の絵が描かれています。そして、タ

ヒチの自然、動物、風習、生活が画面全体に描かれています。

人の一生を表現していることは確かです。「我々は何者なのか」という問いは、ここで取り上げる「自己の確立」の問題とすることができるでしょう。

「自分とは何者なのか」「自分とは何か」という問題を考えてみましょう。

### まず、青年期について基本的な理解を確認する

社会学的には青年期が第二の誕生の時期であるという意味を持つようになったのは、近代資本主義が成立して以降のことであると言われます。近代以前の社会では、それぞれの社会の要請に見合った何らかの通過儀礼が存在し、その儀礼の後に大人として扱われていました。しかし、資本主義の発達にともなう社会の複雑化や労働の高度化に適応できるように長い学習期間が必要となり、子供と大人の間に青年期が成立したと説明されます。

しかし、ルソーの『エミール』には、「われわれはいわば二度生まれる。一度目は生存するため、二度目は生きるために。一度は人類の一員として。二度目は性をもった人間として。……わたしのさっき言った第二の誕生である。いまこそ人間が真に人生に対して生まれるときなのである。」とあります。心理学的には青年期とは自覚的に自我に目覚め、自分を意識し、主体的に考え、行動するようになる時期であるということが出来ます。このことは、社会の変化に関係のない、普遍的な人間存在に関わる課題であると受けとめるべきでしょう。

さて、「自己とは何か」、「自己のアイデンティティ（自己同一性）確立」がいかにして可能であるのかを考えてみましょう。

青年期とは、「身体の急速に発展する一方で、心理・社会的に未熟状態で、子どもでも大人でもない存在として不安定な時期である」、「感情の起伏が激しく、自分をコントロールできない時期である」と言われます。便宜的に、青年期を前期、中期、後期と区分します。

- ①青年期前期 12～15歳 自分の内面に関心が向き、不安な気分、反抗的になる。
- ②青年期中期 15～18歳 自己の内面に沈潜し、理想を求め、誇大妄想になる。
- ③青年期後期 18～23歳 現実に関心を向け始め、自分を客観的に見つめるようになる。

皆さんは、自分は青年期後期に足を踏み入れていることを受けとめていますか。

### 自己とは何か

ここで、論を進めるために、自己とは何のことを言っているのかを確認しておきます。この授業では、以下のように考えます。

「自己とは、物事を考え、決断し、主体的に行動する主体としての自分のことである。」

（※この授業での「自己の定義」）

青年期以後の私達は自我に目覚めた者として、日々、考えが中途半端であっても、決断が本意であるかないかに関わらず、自分の決断のもとに行動していると言うべきでしょう。その行動が自分の主体的なものであるとして責任を取れるようになることが自律ということになるでしょう。しかし、「自己の確立」とは、自律を可能にする自己の主体性を確立

するという問題です。

### 自己について考えることの限界について

「主体としての自分」が自己であるということから、自己について考える上で、限界があります。自己の問題を限界を超えず、的確に考えるために、その限界を明確にしておく必要があります。

#### ①あくまで主観であって、客観化できない

自己とは主体としての自分であって、自分で自分を客観化できません。そのことを、「自分の顔を自分で見るができない」という言い方で言われます。鏡によって見ることができると言うのでしょうか。しかし、それは鏡という媒介を通したものであって、左右が反対になっています。客観的にこれがそうであると理解することができない。（※参考 トマス・ネーゲル著『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房）

#### ②固定化、確定化できない

ある時、「これが自分である」と受けとめられるようなことがあったとしても、それはその時、一時的にそう思えたことであって、次の瞬間には変化していると言うべきでしょう。自己とは死ぬまで変化、成長するものであって、固定化できない。これだと思って捉えても、指の間から砂がこぼれ落ちていくイメージでよく表現されます。人間は死ぬまで変化し続けます。

客観化、固定化できないという自己について考えることの限界があります。

### それでも、少しでも客観化して理解するための青年期の心理的特徴

青年期における心理的な特徴を紹介します。客観的に自己を捉えることができないもどかしさ、不安に対して、少しでも客観化して見つめることのできるように、青年期の心理的な特徴を紹介したいと思います。

#### ①自分に自覚的に目覚め、自分を強く意識する

他者違いを強く意識する。（個別化の意識）孤独を感じる。

他者比較することによって、劣等感に悩む。

#### ②自分で考えるようになり、今まで教えられてきたことに疑問を持つ

納得のいかないことに反発する 反抗期

#### ③自由への衝動

不自由を感じ、何かに束縛されているように感じる。

衝動的な行動に走る。 キレル

#### ④日常ではない、異常なことに関心が向く

超常現象、オカルト、マジック ……

不可思議な世界に興味を持つ 特別な何かに関心が向かう。

#### ⑤仲間を求める

気が合う者との仲間意識が強くなる。 つるんだりする。

家族より友達関係に気が向き、大切に思える。

※逆に作用すると気に合わない者を嫌い、いじめる

⑥すぐに決着をつけたがる

中途半端を嫌い、白黒をすぐにはっきりさせたいと思う。

一方的な自己主張をする。 けんか

⑦空想への逃避

独りになりたいと思う 自分だけの安住できる世界を求める。

芸術的な創作へのあこがれ、動機となる。

⑧些細なことで絶望する

些細なことが重大事となって、絶望する。

死に直結するような考え方になる。 自殺願望

さて、少し寄り道



まど・みちおさんの童謡詩に「ぞうさん」があります。

ぞうさん ぞうさん お鼻がながいのね  
そうよ 母さんも長いよ

團伊玖磨氏が曲をつける時に、当初の詩は「お鼻がながいのね」でしたが、「お鼻がないのね」にして良いかと打診されたそうです。まどさんは迷った末に了承したそうです。まどさんは、生前このことをずっと後悔していたと語っていました。このことで詩の印象が変わってしまいました。

この詩は「鼻がながいのね」と子象が悪意ある意地悪な言葉をかけられても、母親のことが大好きで、誇りに思っているのに、「そうよ 母さんも長いよ」と応え、聞き流している子象の素直な気持ちを表現したものです。しかし、團伊玖磨氏の申し出を受け入れた結果、子象が鼻の長いのを自慢しているような印象になってしまいました。この詩はいじめに負けないで、意地悪な言葉を受け流している子象の素直な気持ちを表現したものであると、まどさん自身が解説しています。

しかし、「そうよ 母さんも」と言っただけで自分を肯定できるのは、幼児期、児童期、あるいは少年期までのことで、青年期には親と独立した存在として自己肯定感を形成することが求められるということになると言えるでしょう。（「自立」の問題）

「我々はどこから来たのか」という問題

受け身としての存在 吉野弘に『I was born』という詩があります。

## I was born 吉野 弘

.....

確か 英語を習い始めて間もない頃だった  
 或る夏の宵。.....  
 その時 僕は〈生まれる〉ということが まさしく  
 〈受身〉である訳を ふと 諒解した。  
 僕は興奮して父に話しかけた。  
 ——やっぱり I was born なんだね——  
 父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。  
 僕は繰り返した。 ——I was born さ。受身形だよ。  
 正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。  
 自分の意志ではないんだね——

この詩は、「生まれる」を英語表現  
 では「I was born」であり、受身形で  
 あることから、自分という存在は自分  
 の意思で生まれて来たのではなく、存  
 在させられた存在であるということに  
 気づいたと読み取ることができます。

私達は気づいたときには存在してい  
 たのであり、自分の意思に関係なく存

在させられていました。

自我に目覚めるということを、ルソーが「第二の誕生」と表現したこともそのことを示  
 していると言えます。

## キリスト教人間観

## ①自分を超えた存在によって存在させられている（※被造性ということ）

## 詩編139:13~16

(旧約聖書 980頁)

<sup>13</sup>あなたは、わたしの内臓を造り  
 母の胎内にわたしを組み立ててくださった。  
<sup>14</sup>わたしはあなたに感謝をささげる。  
 わたしは恐ろしい力によって  
 驚くべきものに造り上げられている。  
 御業がどんなに驚くべきものか  
 わたしの魂はよく知っている。  
<sup>15</sup>秘められたところでわたしは造られ  
 深い地の底で織りなされた。  
 あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。  
<sup>16</sup>胎児であつたわたしをあなたの目は見ておられた。  
 わたしの日々はあなたの書にすべて記されている  
 まだその一日も造られないうちから。

聖書は、私達が自分の意思によって存  
 在しているのではない、神によって存在  
 させられていると教えます。

旧約聖書の中の詩編139編に左のよう  
 な内容があります。（頁数は新共同訳聖  
 書のものです。）

詩編で「あなた」と呼びかけられてい  
 る相手は神のことです。この詩編は私と  
 いう存在が神によって驚くべき存在に形  
 づくられていることの不思議さを驚き、  
 そのことへの感謝が表現されています。

私達は神によって存在させられている  
 存在であると聖書は教えています。

## ② “Imago Dei（神の似像）”としての人間理解（人格的存在であるということ）

## 創世記1:27

(旧約聖書 2頁)

神は御自分にかたどって人を  
 創造された。神にかたどって創造  
 された。

人間は「神にかたどって」創造された。  
 すなわち、神に似せて造られたと教え  
 ています。

神は、永遠無限の霊なる存在であり、  
 姿かたちを持ちません。（キリスト教神  
 観）従って、神の姿かたちに似せてとい



うことではありません。

キリスト教の神は人格神です。その神に似せられたということから、神が人格を持っておられるように、人間も人格を持ち、神との関係に生きる者として造られたと理解することができます。

**マタイによる福音書16:26**  
(新約聖書32頁)

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

すなわち、人間は人格を持つ、たった一人の存在である。かけがえのないたった一人の尊い存在であると教えています。

「人の命は地球よりも重たい」という言葉の基となった、イエス・キリストの言葉（マタイによる福音書16:26）も、一人の存在は何ものに代えがたいことを教えていると言えるでしょう。

さらに、③人間には永遠を求める思いがある

人間には、その場だけの一時的なことによっては満たされない、心の深みがある。すなわち、人間には、永遠を求める思いがあると教えています。

**伝道者の書 3:11**  
(コヘレトの言葉3:11 新改訳)  
(旧約聖書 1037頁)

神のなさることは、すべて時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

従って、その場限りの一時的なことによっては満たされない心の深みがあると教えています。(伝道者の書3:11)

※参考

ティーリケの「究極的関心」

シュライエルマッハーの「絶対依存の感情」

キリスト教人間観からは、青年期とは「永遠を求める思いに目覚める時期」であると言えます。一時的なものでは満たされない心の深みに目覚め、普遍的な確かな意味の持つものを求める時期であるということになります。

生きる意味や意義を求めることも「永遠を求める思い」を持つ人間存在の根源的なあり様によっていると言えます。

## まとめ

エリクソン以来、アイデンティティの確立ということが言われています。アイデンティティとは「自分であること」「真の自己」「自分固有の生き方や価値観」と訳されていますが、「自分の連続性・単一性、または独自性・不変性であり、また自分としての同一性の意識感情である」と理解されています。(※参考 E.H.エリクソン著『自我同一性』小此木啓吾訳編 誠信書房)

自己を知ることには限界があります。自分を完全に知り得ないという状況で、「自分である」という自己認識をどうすれば持つことができるのか、ということが課題となります。キリスト教人間観からは、神と対峙することによって可能であるということになるでしょう。

人間は「神の似像」であり、人格を持ち、永遠を求める思いを持つ存在であるとするのがキリスト教人間観です。

### 詩編 16:8

(旧約聖書 846頁)

わたしは絶えず主に相対しています。  
主は右にいまし  
わたしは揺らぐことはありません。

そのような人間存在が深い内省と自己認識を持つことができるのは神（人格を持ち、永遠、無限の存在としての神（キリスト教神観）に対峙することによって可能であるということになります。

詩編16:8の聖書の言葉は、揺らぐことのない自己認識は、神に相対（対峙）する時に持つことができると告白しています。

キルケゴールは、「神との関係において、神の前に一人で立つという実存的単独者としての自己が本来の自己である」と言っています。（※参考 実存的自己理解 キルケゴール著『死に至る病』梶田啓三郎訳 中央公論社）

### 『告白』アウグスティヌス

人間は取るに足らぬ被造物でありながら、あなたをたえようと欲する。あなたは人間を呼び起こして、あなたをほめたたえることをよろこびとされる。

あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである。

(『告白(上)』岩波文庫 第31刷 2007年)

絶対的、無限的、永遠的存在である神に相対（対峙）するとき、本来の自己を確認することができる、というのが聖書（キリスト教）の教えです。

人とのつながりに安心感を求め、周りに調子を合わせ過ぎ、自分を見失うことを経験していませんか。

独りになることを恐れず、神に相対する（向き合う）ことをして、本来の自己を確認してください。

### 詩編62:6~7

(旧約聖書 895頁)

わたしの魂よ、沈黙して、ただ神に向かえ。  
神にのみ、わたしは希望をおいている。  
神はわたしの岩、わたしの救い、岩の塔。  
わたしは動揺しない。

以上のことがらが、キリスト教人間観から導かれる「自己の確立」に関する理解となります。

## 課題

- 1 現在、新型コロナウイルスが身近に存在する（With Corona）と考えた新しい生活様式が要請されています。なお、不自由な生活を強いられています。しかし、「求められ



ているからではなく、自分からそうすることが大切である」と言われます。

今の状況を「自己の確立」と関連して考えられるところを書きなさい。

- 2 「人間は人格を持つたった一人の尊い存在であり、永遠を求める思いを持つ」という人間観をどう思うか、考えることを書きなさい。

※それぞれの課題に300字程度で答えてください。

（字数が多くなることはかまいません。）

※質問、感想等は、コメント欄に自由に書いてください。

## 藤山担当授業 その2「社会性」の問題 キリスト教の精神と文化Ⅰ

藤山担当の授業は、青年期問題として「自己の確立」の問題（青年期問題1）, 「社会性」の問題（青年期問題2）, 「自己実現」の問題（青年期問題3）について、聖書（キリスト教世界観、人生観）から学ぶことが目的です。

さて、人は一人では生きていけません。さまざまな人々と関わって生きています。私達は家族、地域の人々、所属している組織や集団（会社、学校など）の人々、そして友人などの多くの人々と関わって生きています。

人々の関わりの問題は「社会性」の問題ということになります。キリスト教では「隣人愛」の問題と言うことになるでしょう。私達の人生を豊かにし、生きる喜び、生きがいに深く関わっている問題です。

### はじめに

マイケル・ジャクソンの曲に“ Heal the world ”というものがあります。マイケル・ジャクソンはこの曲名の慈善団体を立ち上げていました。その団体を通して、世界中の災害に遭った人々に募金をしていました。この曲に、その慈善団体の設立の意図が表現されています。

折り返しの歌詞は以下のようになっています。

Heal the world.  
Make it a better place  
for you and for me and the entire human race.  
There are people dying  
If you care enough for the living.  
Make a better place for you and for me.

世界を癒そう  
より良い場所にしよう  
あなたと僕と人類のために  
人々が死んでいっている  
あなたが生けるものを慈しむかである  
より良い所を作ろう あなたと私のために

「あなたの慈しみがこの世界を癒す。あなたが慈しみを示すかどうにかかっている。」と繰り返し歌っています。そして、この曲の詠い出しの歌詞に、マイケル・ジャクソンの人間観が表されています。

There's a place in your heart.  
And I know that it is love.

あなたの心の中には場所がある  
そこには愛があることを僕は知っている

「人間の心の中には愛がある。人々は自覚していないだけなのだ。その愛に目覚めるとき、虐げられている人々を救おうとするだろう。さあ、愛に目覚め、思いやりの心を起こし、手を差し伸べる行為によって、世界を変えよう。(癒そう) 愛が地球を救う。愛は世界を変えることができる。」と歌っています。

これは「隣人愛」を歌っていると言えるでしょう。

さて、人間の心の中に、果たして、本当に「愛」があると言えるのでしょうか。

「隣人愛」について考えてみましょう。

### 「善きサマリア人」の例え話



ゴッホの作品に『善きサマリア人』というものがあります。

ゴッホは、オランダのプロテスタント教会の牧師の息子で、牧師になることを志しましたが、断念し、画家としての道を目指しました。

ゴッホは聖書の内容を題材とした絵をいくつか描いています。いかにも聖書の内容に詳しいゴッホの絵と言えるでしょう。

この絵の題材になっている「善きサマリア人」というのは、イエスの例え話の一つで、キリスト教の「隣人愛」が説かれるときに、必ず引き合いに出されます。

以下が、「善きサマリア人」の例え話の新約聖書の本文です。読んでください。

### 善きサマリア人 ルカによる福音書10:30~37

(新約聖書 126頁)

<sup>30</sup>イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。<sup>31</sup>ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。<sup>32</sup>同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。

<sup>33</sup>ところが、旅をしていたサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、<sup>34</sup>近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。<sup>35</sup>そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』<sup>36</sup>さて、あなたはこの

三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」  
<sup>37</sup> 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

ゴッホの絵には、通り過ぎて行った祭司長やレビ人の後ろ姿が描かれています。  
(※絵を見て、確認してください。)

#### 「善いサマリア人」の例え話の解説

あるユダヤ人が旅の途中、追いはぎに襲われ、持ち物をすべて奪われ、服もはぎ取られ、半殺しの状態で道端に捨て置かれました。そこに祭司が通りかかりました。祭司とは宗教的指導者と考えることができます。礼拝をつかさどり、人々を教える立場の人物です。苦しんでいる者を助けよと教えていたはずでしたが、いざ、その場面に直面すると祭司は知らん顔して、道の向こう側を通り過ぎていきました。レビ人とはユダヤ人意識の強い、民族主義的な立場に立つ人と言うことができるでしょう。同胞のユダヤ人が半殺しの目に遭っていたにも関わらず、やはり、知らん顔して、道の向こう側を通り過ぎていきました。しかし、サマリア人は追いはぎになった人を助けたという話です。サマリア人とは宗教的にも人種的にも意識が弱い人々で、ユダヤ人はサマリア人を軽蔑し、嫌っていました。そのようなサマリア人が助けたという話です。

さて、この例え話は何を教えているのでしょうか。イエスがこの例え話をするキッカケになったのは律法の専門家（当時の権威ある宗教的指導者）の質問でした。「隣人とはだれか」というものです。そして例え話の後に、今度は、イエスの方から律法の専門家に、「だれが隣人になったか」と問うています。それぞれの質問に、問題の本質が示されています。律法学者の質問は、隣人を差別するための線引きを聞いています。差別が前提になった考え方です。しかし、イエスの質問は、差別を超えて隣人になるべきことを示唆しています。隣人を愛することが「隣人愛」ということです。隣人とすべき人と設定して、その設定内の隣人を愛するというのは、同胞愛と言えるかもしれませんが、「隣人愛」とは違います。

祭司とレビ人と、サマリア人とで何が違うのでしょうか。そのことを聖書の本文から考えてみましょう。

サマリア人は、「その人を見て憐れに思い、……」（ルカによる福音書10：33）とあります。日本語では、「憐れに思う」とは、自分を一段上において、相手を下に見て、憐れむという雰囲気があります。

しかし、「憐れむ」という語は、スプラUNKニゾマイ（ギリシャ語  $\sigma\pi\lambda\alpha\chi\chi\upsilon\iota\zeta\omicron\mu\alpha\iota$ ）であり、その原意は「内臓が動く」です。すなわち、「憐れむ」とは内臓が動くくらい共感するということを意味しています。他者の痛みが自分の痛みとして感じるという意味です。だから、放っておくわけにいかないということになります。「もし自分だったら」と考える想像力と思いやりの心であり、同じ人間として、辛さや苦しさを共感できる心のことであると言えます。（ヘブライ人への手紙13：3）

さらに、「隣人愛」とは何か考えてみましょう。

### 愛とは何かについて

キリスト教の「愛」の考え方に近い言葉に、「仁」（儒教）「慈悲」（仏教）があります。それぞれの意味を調べてみましょう。

「仁」（儒教）… 自他のへだてをおかず、一切のものに親しみ、いつくしみ、なさけぶかくある、思いやりの心

「慈悲」（仏教）… もろもろの衆生をあわれみ、苦を除き、楽を与えようとする情け、思いやりの心  
 （※仁、慈悲は、儒教、仏教において人間の最も徳の高い行為であるとしている。） 以上『岩波国語辞典』1975年による

「愛」（キリスト教）… 「隣人を自分のように愛しなさい。」

イエスの言葉（マタイのよる福音書22：39）

下線を引いたところが共通していると言えます。そこで、以下のように、愛を定義します。（※この授業での「愛」の定義）

「愛とは、

自他の区別をおかず、相手の存在を尊び、いつくしみ、大切に思う心である。」

### 整理をしておきたい問題 「好き」と「愛する」はどう違うのか

ここで、「好き」と「愛する」の違いを考えておきたいと思います。

<div> <div></div> <div></div> </div>	好き…	<u>自分の好み</u> が基準である	⇒変わる可能性がある
		↑自己中心	※自分の好みが変われば変わる。
<div> <div></div> <div></div> </div>	愛する…	<u>相手の存在を慈しみ</u> 、大切に思う心	⇒変わらない
		↑相手中心 ※敵を好きになることができなくても 「敵を愛せ」は可能である。マタイ 5：44	

愛はどこまでもその人にとって善いことを思い計り、幸せを願う心であり、変わらない。

### 参考

#### 『我と汝』 マルティン・ブーバーから

〈われ〉はそれ自体では存在しない。根源語〈われ-なんじ〉の〈われ〉と、根源語〈われ-それ〉の〈われ〉があるだけである。

根源語〈われ-なんじ〉は、ただ全存在をもって語り得るのみである。……〈われ〉は〈なんじ〉と関係することによって〈われ〉となる。〈われ〉となることによってわたしは、〈なんじ〉と語りかけるようになる。  
 すべて真の生とは出会いである。

愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある。愛の中にいるひとは、……唯一の存在となり、本質的に向かい合う〈なんじ〉となる。（『我と汝・対話』植田重雄訳 岩波文庫）

⇒ 世界は人間のとる態度によって〈われ-なんじ〉〈われ-それ〉の二つとなる。  
〈われ-なんじ〉は、〈われ-それ〉とは異なり、人格的な関係であり、真実の自己認識〈われ〉をもたらす。愛は、唯一の存在として本質的に向き合う関係であり、喜び、深い感動をうみだす関係である。

ブーバーは、人格的なくわれ-なんじ>の関係は、愛によって相手が唯一の掛けがえのない存在となると言っています。愛はそのような関係を生み出す力ということです。そして、愛によるくわれ-なんじ>の関係は真実の自己認識を生み出し、本当の相手と向き合う関係になると言っています。

さらに、聖書が教える愛の本質

コリントの信徒への手紙一 13:4~7  
(新約聖書 317頁)

<sup>4</sup>愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。  
愛は自慢せず、高ぶらない。<sup>5</sup>礼を失せず、  
自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを  
抱かない。<sup>6</sup>不義を喜ばず、真実を喜ぶ。  
<sup>7</sup>すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、  
すべてに耐える。

コリントの信徒への手紙13章は「愛の章」と呼ばれている有名な聖書の言葉です。キリスト教結婚式で必ずと言ってよいほど朗読される言葉です。

「自分の利益を求めず、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」とあります。

コリントの信徒への手紙一 13:13  
(新約聖書 317頁)

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。  
その中で最も大いなるものは、愛である。

自分に執着せず、相手の存在を尊び、見返りを求めず、与える愛です。

そして、愛は何ものにもまさり、永遠の意味を持つというのが聖書の教えです。  
(コリントの信徒への手紙一13:13)

聖書が教える愛は、アガペー (ἀγαπη) の愛です。そのような愛に生きることが人間の生きる意義であり、生きる目的であるとするのが、聖書の教えです。

参考

エロース…自分に欠けているものを相手に  
ἐρως 認め、求める愛  
性愛、哲学知探究心  
フィリア…相手の人格を認め、尊敬し、  
φιλία 愛する愛、相互の愛  
友情、同志愛  
アガペー…見返りを求めず、与える愛  
ἀγαπη 犠牲愛、神の愛

エロース、フィリアは自他の区別 があり、見返り、応答を求める思いがあります。  
しかし、アガペーは自他の区別をおかず、見返りを求めない愛のことです。

### しかし、罪深い人間の現実がある

隣人を愛すべきであると力説されても、私達には愛せないという現実があります。

「善いサマリア人」の例え話に登場する祭司、レビ人が私達の姿に近いと考えざるを得ないという現実があります。そう考えると、私達は絶望的です。

#### ヨハネの手紙一 4:8、11 (新約聖書 445頁)

**愛することのない者は神を知りません。  
神は愛だからです。.....  
愛する者たち、神がこのようにわたしたち  
を愛されたのですから、わたしたちも互いに  
愛し合うべきです。**

「愛されなかった者は、愛することができない」と言われます。

聖書は、隣人を愛せるようになるために、アガペーなる神の愛に愛されていることを知る必要性を説いています。（「神は愛である」ということが、キリスト教における神理解です。※キリスト教神観

あなたを存在せしめ、あなたを愛している神の愛に目覚めることが必要である、そうすることで隣人を愛することができるようにされるとというのが聖書の教えるところです。

### なぜ、「神は愛である」のか

キリスト教は、イエス・キリストが、「神は愛である」ことを説き、その生涯を通して「神は愛である」ことを示したと考えます。（ヨハネによる福音書1：18）

さて、キリスト教の教会堂には十字架が掲げられています。（学園の『キアラ館』内の礼拝堂の正面に掲げられています。）イエス・キリストが十字架刑に処刑されたことに由来しています。聖書はイエス・キリストの十字架刑には、至高の神の愛が表されていると教えています。

### キリストの十字架上の言葉

イエス・キリストは十字架刑の苦しみの中で、七つの言葉を口にしました。（①ルカによる福音書23：34、②ルカによる福音書23：43、③ヨハネによる福音書19：26～27、④マタイによる福音書27：46（マルコによる福音書15：34）、⑤ヨハネによる福音書19：28、⑥ヨハネによる福音書19：30、⑦ルカによる福音書23：46）

その言葉に、キリストの十字架刑による死の意味を読み取ることができます。

第四番目の言葉は「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。）」（マタイによる福音書27：46）というものです。

この言葉は、キリストが神に見捨てられたことを表しています。神に見捨てられるということは神の究極の裁きを意味しています。

十字架刑に処せられているキリストの姿は神の裁きを受けている姿を表しています。それは、罪のないキリストが罪のある私達が受けなければならない神の裁きを身代わりに受けていることを意味する、キリストの十字架に神の至高の愛が表されている、と聖書は教えています。（キリスト教贖罪論）



キリストを十字架に処するまでして私達を救おうとされた神の愛が表されています。（※さらにこのことは、私達を救うためにキリストが十字架刑に処せられなければならなかったという神の義も表されていることになります。ローマの信徒への手紙 3：25～26）

**ローマの信徒への手紙 5:8  
（新約聖書 279頁）**

しかし、わたしたちがまだ罪人であつたとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

キリストの十字架刑は、神が私達を愛しておられること、そして、神は決して私達を見捨てられないことの証しであることを示しています。（キリスト教救済論）

キリストの十字架刑に、私達に対する神の愛が表されています。

さて、私達は、どうすれば「神の愛」を知ることができるのでしょうか。

イエス・キリストの十字架を仰ぐ（※仰ぐとは、知り、受けとめる行為）ことによって知ることができるというのが、聖書の教えです。

神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、  
わたしたちも互いにに愛し合うべきです。（ヨハネの手紙一 7：11）

**まとめ**

人は「隣人愛」に生きるとき、生きる意義、喜びを見いだすことができる。しかし、人間は自己中心であり、自他の区別を超えて愛せないという人間の現実の姿がある。

**平和の祈り**

主よ わたしを平和の道具にしてください  
憎しみのあるところに 愛を  
いさかいのあるところに ゆるしを  
疑いのあるところに 信頼を  
絶望のあるところに 希望を  
暗闇のあるところに 光を  
悲しみのあるところに 喜びをもたらす者にしてください

ああ 主よ  
慰められるより 慰めることを  
理解されるより 理解することを  
愛されるより 愛することを わたしが求めますように  
与えることは 受けることであり  
ゆるすことは ゆるされることであり  
死ぬことは 永遠のいのちに生まれることだからです

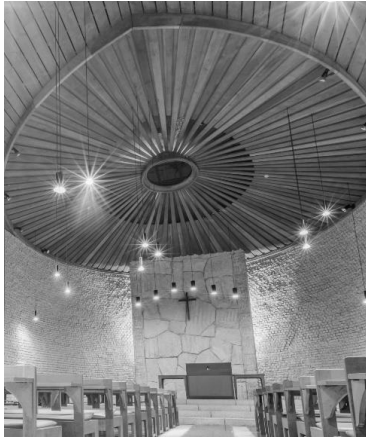
アッシジのフランシスコの祈り

それを乗り越えるために、人知を超えた神の愛を知る必要がある。神の愛を知ることにより、私達も「隣人愛」に生きる道が開かれる、と聖書は教えています。

最後に、アッシジのフランシスコの「平和の祈り」を紹介しします。

マザー・テレサが、生前、毎朝の祈りにしていたと言われています。

「隣人愛」に生きることを詠った詩であり、祈りです。



キアラ館礼拝堂内部

**課題**

- 1 『善きサマリア人』の例え話から  
祭司やレビ人と違い、サマリア人はなぜ追いはぎに襲われた人を助けたのですか。
- 2 キリストの十字架が、なぜ神の愛を表しているのですか。

※それぞれの課題に300字程度にまとめて書いてください。  
(字数が増えることはかまいません。)

### 藤山担当授業 その3「自己実現」の問題 キリスト教の精神と文化Ⅰ

藤山担当の授業は、青年期問題として「自己の確立」の問題（青年期問題1）, 「社会性」の問題（青年期問題2）, 「自己実現」の問題（青年期問題3）について、聖書（キリスト教世界観、人生観）から学ぶことが目的です。（なお、青年期問題とは青年期に直面する課題ということです。）

人間は人格を持つたった一人の尊い存在である、と前々回学びました。同じ人はいないと同じように、生き方も人によって違います。「自己実現」とは、自己を実現することですが、それはその人らしい生き方によって、すなわちその人の個性や能力を生かした生き方によって実現すると言えるでしょう。

マズロー（アメリカ合衆国の心理学者「自己実現理論」）は、人間とは「自分の可能性や能力、目標に向かって努力することによってより充実した満足を得ようとする存在である」とし、「自己実現に向かって動機づけられた成長動機こそが人間性の証である」と言っています。（参考『完全なる人間 魂のめざすもの』上田吉一訳 誠信書房 1964）

さて、キリスト教では個性や能力を「賜物」という言い方をします。従って、キリスト教では「自己実現」とは、「賜物を生かす」生き方の問題ということになります。

**はじめに**

まず確認すべきこと 人によって、自己実現の生き方（あり方）は異なるということです。人それぞれに個性や能力が違っており、同じ人は一人もいません。当然、人によって生き方が違う。他人の生き方を真似ても、私の自己実現を可能にすることには決してならない、私は自分の道を進むしかありません。

## わたしと小鳥と鈴と 金子みすゞ

私が両手をひろげても  
お空はちっとも飛べないが  
飛べる小鳥は私のように  
地べたを速くは走れない



私がかからだをゆすっても  
きれいな音は出ないけど  
あの鳴る鈴は私のように  
たくさんな唄は知らないよ



鈴と、小鳥と、それから私  
みんなちがって、みんないい

金子みすゞの詩に「わたしと小鳥と鈴と」があります。

金子みすゞは童謡詩人と認められ、「宗教詩人」とも評価されています。

この詩は「自分は自分で良いのだ」ということを励ます力があると言われます。

まさしく、私の道を行くしかなく、それで良いということでしょう。

## キリスト教人間観の確認

キリスト教人間観は“Imago Dei（神の似像）”としての人間観というものでした。（創世記1：27）それは、「人間は人格を持った一人の存在である」というものでした。

「一人ひとりが特別な存在である。」「同じ人はいない。」ということは、「自己実現」の問題は一般化して考えることができないということを意味します。その人によって、違うことになります。

## コリントの信徒への手紙一 7:7 （新約聖書 307頁）

**人はそれぞれ神から賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います。**

聖書にも、人によって賜物（個性や能力）が違うのであるから、人によって生き方が違うことになる、とあります。（コリントの信徒への手紙一7：7）

それでは、「自己実現」を、どのように考えれば良いのでしょうか。

「自己実現」とは、その人の個性、能力を生かしたその人らしい生き方によって実現するというものであり、したがって人それぞれに個性や能力は異なり、その実現のあり方は人によって異なります。さらに、私達は自分の個性や能力を見極めることができるのか、という問題があります。

自分のことを知ることに限界があることを、「自己の確立」の問題を考えたときに、確認しました。自分を知ることに限界があるのと同じように、自分の個性や能力を見極めることはできないと言うべきでしょう。自分の個性や能力を見極めることができないのであれば、「自己実現」は不可能であると言わざるを得なくなります。

### ここで、自己とは何かの確認

「自己とは、物事を考え、決断し、行動する主体としての自分のことである」と考えました。自己をそのように理解するならば、主体的に考え、決断し、行動するときに、その人らしさ（自己）が表れ、その人の個性や能力が生かされることになります。

ということは「自己実現」とは、主体的にいかに生きるかという問題になります。

### アブラハムの生涯から学ぶ

旧約聖書の創世記12章には、アブラハムが新たな人生の歩みを始める物語が描かれています。この個所には「アブラム」となっていますが、後に「アブラハム（多くの国民の父）」と呼ばれるようになるので、同一人物です。アブラハムが主体的に決断し、新たな人生に踏み出したときの物語です。

#### 創世記 12:1～2、4 (旧約聖書 15頁)

主はアブラムに言われた。  
「あなたはあなたの生まれ故郷  
父の家を離れて  
わたしが示す地へ行きなさい。」  
.....

**アブラムは、主の言葉に従って旅立った。**

アブラハムは主からの呼びかけの言葉に  
応えて、決断して旅立ちました。(創  
世記12: 1～2, 4)

この聖書の言葉からは、アブラハムが  
旅立った時、「わたしが示す地へ行きな  
さい」とあるので、行き先が分かっ  
ていたように思えますが、実はそうでは  
ありませんでした。

新約聖書のヘブライ人への手紙には、その時のアブラハムの様子が描かれています。(ヘブライ人への手紙11: 8)

#### ヘブライ人への手紙 11:8 (新約聖書 415頁)

信仰によって、アブラハムは、  
自分が財産として受け継ぐことになる  
土地に出て行くように召し出されると、  
これに服従し、行き先も知らずに出発  
したのです。

アブラハムは、行き先も分からず、た  
だ、神の呼びかけに応えて、旅立った  
ということを意味しています。

すなわち、アブラハムは、今、いると  
ころから離れること、一歩踏み出すこ  
とをしたということなのです。

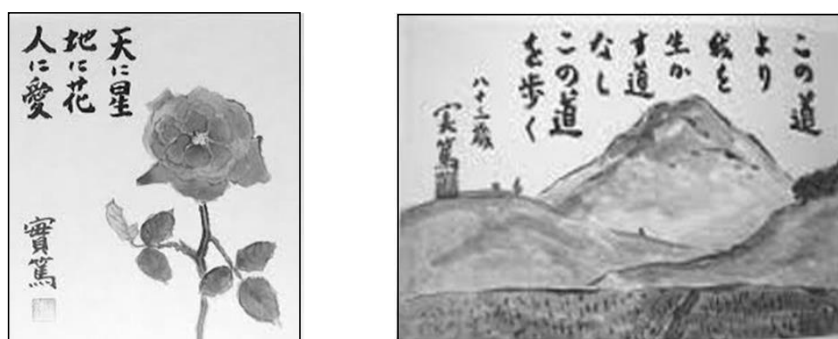
これが、アブラハムの主体的な決断、  
そして行動でした。

自分の人生を生きるためには、今いるところの居心地がよくても、勇気をもって、未知の世界に踏み出すことの必要性を教えています。

まさしく、時には、自分らしく生きるために未知の世界に踏み出す勇気が求められると言えるでしょう。(「自立」の問題 青年期問題4)

さて、「主の呼びかけ」に応答するということですが、森有正（1911～1976年 哲学者、フランス文学者）は、「主の呼びかけ」を人生の節々に聞く「神の細き御声」であり、「内なる声」「内的なうながし」であるということを言っています。（『アブラハムの生涯』『森有正講演集』日本基督教団出版局）

自分の好きなこと、自分のしたいこととは違う、「この道に進め」という導きがあるということです。自分からの主体的な決断によって、その道を選ぶ、自分はこの道を行く、この道しかない并接受とめさせられる人生の選択があるということです。（参考 武者小路実篤の83歳の時の詩画に、人生の晩年に自らの人生を振り返り、「この道より 我を生かす道なし この道を歩く」と描いています。）



武者小路実篤（1885～1976 白樺派の作家）の詩画      こちらは83歳の時のもの

「神の呼びかけ」「内なる声」「内的なうながし」「導き」に応答して生きるという考え方は、自分の内側からではなく、外側からの導き（呼びかけCalling, 召命ベールフ）に応答するということであり、それは「使命」に生きるということを意味します。

人にはその人にしか歩むことのできない道があり、人それぞれに生きる「使命」があると考えるのが、キリスト教人生観ということになります。

**箴言 3：6**  
（旧約聖書972頁）

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。  
そうすれば、  
主はあなたの道をまっすぐにされる。

神を仰ぎ、神を信頼して、自らの「使命」に生きることが「自己実現」のなる道であるということである。

従って、神を信頼し、勇気をもって踏み出すことが「自立」の行為ということになります。

**「人生の問いに対するコペルニクス的転換」について**

私達は、私の人生なのだから私の好きなように生きるのだと言います。しかし、自分が本当に好きなこととは何か分かっているのでしょうか。多分に、自分が楽しく感じるかということで判断しているように思います。「内的なうながし」「内なる声」が本当に私の望んでいることを示しているのではないのでしょうか。

**参考**

「人間の根源的な欲求」に関しての心理学的な見解を紹介します。生きるという問題は自分の好き嫌いの次元の問題ではなく、根源的な欲求という次元の問題であるとして、人間の根源的な欲求に関しての心理学的な見解を紹介します。

**①フロイト説 「快楽への意志」 快楽欲説**

人間は生まれながらの動物的な欲求（リビドー）を持ち合わせている。その欲求を満たそうとすること、すなわち「快楽的な欲求」を満たそうとすることである。さらに「性的快楽欲」であるとする。

**②アドラー説 「力への意志」 権力欲説**

人間の最も強い欲求は「権力への意志」である。自己保存、自己主張を満足させ、他人に自己を優越させようとすることである。自己肯定の欲求である。

**③ فرانクル説 「意味への意志」 意味欲説**

人間は単に欲望が満たされることを求めるのではない。人間の根源的な欲求は「意味の欲求」である。自分の存在、生きることの意味（ロゴス）を求める。

※注意 ここで言っている根源的欲求とは、生命や種族の保存のための一次的、生理的欲求とは異なります。何を最も優先して求めるかという心理学的な見解です。

フランクルは「人生の問いに対するコペルニクスの転換」ということを言っています。

「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点の変更なのである。……すなわち人生から何をわれわれは期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。…… 人生の意味とは結局、われわれが問うものではなく、人生からわれわれが問われているものである。各人が自分の人生の使命に生きてつくっていくものに他ならないのである。」と言っています。（V.E.フランクル『それでも人生にイエスと言う』春秋社）

快楽欲、権力欲を満たすことを求めて生きることは、自己充足、自己満足を得られるであろうが、自己実現にはならないであろう。時代や環境は私達が生きていく上での、自分では選ぶことのできない、与えられた条件である。その条件下にいかにか主体的に生きるかによって、私の人生の意味をいかにか形成（実現）するかが問われているのである。自己実現というのは、自己の欲望の満足、充実感を求めるという生き方ではなく、その与えられた条件下に、いかにか意義ある人生を送るかことによって、すなわちいかにか使命に生きるかによってなるということでしょう。欲望の満足を求め、自分の欲望に振り回される生き方



ではなく、こう進むべきであると示されることが、すなわち使命に生きることが大事であるということを言っています。

## まとめ

### 自己実現の内実

ローマの信徒への手紙 5：3 ～ 5 に、自己実現の内実が表現されています。

#### ローマの信徒への手紙 5:3～5

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。  
わたしたちは知っているのです。  
苦難は忍耐を、忍耐は練達を、  
練達は希望を生むということを。  
希望はわたしたちを欺くことはありません。

苦難とは、できれば経験したくない嫌なことという意味の語です。

しかし、生きているということは苦難を経験することです。生きている限り、苦難を避けることはできません。

苦難を誇るとは、「使命」に生きることであると言えます。

練達とは、練り上げられた品性や人柄を意味します。すなわち、使命に生きることによって、忍耐することを覚え、品性や人柄が形成される。私達が生きることによって、身に着けるべきことは練達です。それは自己実現の内実を表しています。

### 自己実現の内実

ローマの信徒への手紙 5：3 ～ 5

「練達」：苦難を誇りに生きることによって形成される 人柄、品性

↑  
使命に生きる

↑  
その人らしさ 人格  
「自己実現」の内実

使命に生きて、その人らしい人格が形成されることが自己実現の内実を示す。



レンブラント「放蕩息子の帰還」

## 課題

- 1 自分の好きなように生きるではなく、「使命」に生きるという考え方をどう思いますか。
- 2 フランクルの言う「人生の問いに対するコペルニクスの転換」について説明しなさい。
- 3 藤山担当授業3回によって学んだキリスト教人間観、キリスト教人生観についてへの考えを書いてください。（自由な感想でも良い。）

※それぞれの課題に300字程度で答えてください。  
レンブラント「放蕩息子の帰還」(字数が多くなってもかまいません。)

## 結びに代えて

オンライン授業を行うことによって、オンライン授業を始める時に予想していた以上に学生が積極的に授業に参加したことに驚いている。IC-UNIPA上で、学生とのコメント欄のやり取りで面接授業ではできなかった学生との交流ができた。コメント欄には感想や質問が多く寄せられたが、人生相談のようなことを書いてきた学生もいた。これまでの面接授業で講義をすることで終わってしまっていた授業とは違い、学生と交流することができたことは予想外の利点であった。

以下に、授業資料の最後に課した課題の受講学生の解答を紹介する。紙面の都合上、著者が選んだものになってしまうが、よく考え、自分の解答として答えているものを紹介したい。(※文章表現上の訂正を多少した。)

### 第1回授業の課題の解答例

#### 課題1 (生活科学部心理福祉学科 1年生)

自己の確立とは、自律を可能にする自己の主体性を確立すること。つまり、最終的な自分の決断や行動に対して、自分で責任が取れるようにするということである。そのために、他の誰かから言われたからやるというのではなく、自分自身の意志や判断に基づいて何をするか、どうするべきかを考えて行動する主体性を築き上げることが重要である。

コロナ・ウイルス感染拡大の影響で自粛を求められ、しょうがなく自粛する。という思考ならば、それは周りに言われているからやっているのであり、自分の意志で決断したとは言えない。つまり自分の意志で決断をしていないということはそこには責任が伴わないという考えに陥ってしまう。また、自分はただ言われたことをやっただけだから無関係、自分には責任を取る必要がないという無責任な考えに至ってしまう。そして最終的に周りの人たちにその責任を押し付けることで自己の確立とは程遠いものになり、きっとこの先も周りに流されながら言われたことだけをやり自分では何も責任を取れない人間になってしまう。そのため自粛一つとっても、言われたから・求められたからやるというのではなく、自分自身がこうしたいからという意志に基づいて行動するという主体的な姿勢が大事なのだと思った。

#### 課題2 (生活科学部心理福祉学科 1年生)

その通りだと思う。生きていると良いことばかりではなくて、むしろ辛いことや理不尽に思う事のほうが多い気がする。消えてしまいたいと思う事だって何度もある。しかし、生きていく中で湧き出る様々な感情は、今生きているからこそ感じる事ができるのであって、命がなくなったら何も感じることはできなくなってしまうし何も残らない。人生の目的や生き方、何を願うかはそれぞれ違うが、神によって存在させられている私たち人間は唯一無二の存在であることは皆同じで、失っていい命はない。また、人間は永遠を求める思いを持っているという事だが、なぜ自分は生きているのだろうか？何のために生まれ何をするために生まれてきたのか？と思考が無限ループに入ってしまうことがある。しか

しそれは生きる意味を求めている、永遠を求める思いから来ているものだという事が理解できた。永遠を求める思いがなかったら人生は進まないし、その思いがあるから私たちは希望を持ったり、時には絶望したりしながらこうやって生きていくことができるのだなと思った。

## 第2回授業の課題の解答例

### 課題1（文学部児童教育学科児童教育専攻 1年生）

「善きサマリア人」の例え話から、なぜサマリア人が追いはぎに襲われた人を助けたのかというと、サマリア人には思いやりの心があったからだと言えるだろう。追いはぎに襲われた人のそばを祭司やレビ人が通りかかってもこの二人は知らん顔をしてそばを通り過ぎた。人々を教える立場の人ですら、同胞意識の強いユダヤ人ですら、苦しんでいる人の横を通り過ぎても助けずに通り過ぎたのである。

しかし、悲しいことに現代の人々もこの二人と同じように見て見ぬふりをする人が多いのではないだろうか。例えるなら、いじめられている子を見て見ぬふりをする傍観者のような人々だ。このように見て見ぬふりをする人々の心の中を占めているのは「巻き込まれたくない」「自分には関係ない」「万が一のことがあった場合自分に責任を負わされたくない」等だろう。つまり、結局のところ自分が一番大事なのである。

サマリア人のように困っている人に手を差し伸べてくれる人は少ない。「もし自分だったら」と考え、辛さや苦しみを共感できる心を持ち、自他の区別なく相手を思いやる心があったからこそサマリア人は助けたと感じる。しかも、このサマリア人の凄いところは自分のことを軽蔑し嫌っていたユダヤ人を助けたということである。普通、自分を軽蔑している人には近づきたくないであろう。だが、このサマリア人は助けたのだった。

### 課題2（経営学部経営学科 1年生）

わたし達は罪深く、隣人を愛することができない。人の愛では見返りを求めるものばかりなので、隣人を愛することはできない。どうすれば、見返りを求めず、隣人を愛せるようになるのか。それは神の愛を知ること、隣人を愛することができるようになるのだ。アガペーなる神の愛に愛されていることを知る必要がある。では、どうすれば、神の愛を知ることができるのか。

それはイエス・キリストの十字架を仰ぐことで知ることが出来るようになる。神は罪のないイエス・キリストを罪のある私たちの代わりに十字架刑に処した。そのことによって神はキリストを処するまでして私たちを救おうとしたのだ。そのことにより、実は罪深い私たちを神は愛しておられること、見捨てていなかったことを知ることができる。十字架刑によって、神の愛を感じることが出来なかった人でも神の愛を認知することが可能になったのである。キリスト教の救いを示している。キリストの十字架が神の愛を表している、隣人を愛せるために、そのことを知る必要があると考える。

## 第3回授業の課題の解答例

## 課題1 (看護学部看護学科 1年生)

自分の好きなように生きるではなく、「使命」に生きるという考えは、今、私たち一人ひとりに必要な考えではないだろうかとは私は感じた。よく、好きなように生きることが大事だと耳にするが、好きなことをしているだけでは本当の意味で「自己の確立」はできないのではないだろうか。過去に誰かが“若いうちに沢山失敗しておきなさい”と言っていた。失敗することで得られるものがあり、かつ人生を豊かにする。しかし、好きなように生きているだけでは、きっと失敗する道は通れない。新約聖書のヘブライ人への手紙にもあるように、今、いるところから離れること、一步踏み出すことが重要なのだと深く痛感した。自分の内側からではなく、外側からの導きに応答するという「使命」に生きるということは私たち人間が生きていくうえで極めて重要なことであり、人間観を豊かにし、自分という存在を教えてくれる貴重なものだと私は感じた。

## 課題2 (看護学部看護学科 1年生)

私たちは、私の人生なのだから私の好きなように生きるのだというのが、果たして自分が本当に好きなこととは何なのか理解できているのだろうか。「内的なうながし」「内なる声」が本当に私の望んでいることを示しているのかと考えたとき、フランクフルは人間の根源的な欲求とは「意味の欲求」であり、自分の存在、生きることの意味(ロゴス)を求める「意味への意思」意味欲を唱えたが、そのことにつながった。生きていくうえで人間は様々な欲求をもつ。しかし、単に欲求が満たされることを求めているのではなく、与えられた条件下のなかでいかに主体的に生きるかによって、私の人生の意味をいかに実現するのが問われているのである。自己実現とは、自己の欲望の満足、充実感を求めるという生き方ではなく、与えられた条件下で、いかに意義ある人生を送るか、すなわちいかに使命に生きるかによってなるということなのだと思う。

## 課題3 (看護学部看護学科 1年生)

感想になるのですが、藤山先生の授業を3回受けて思ったことがあります。それは、分かりやすく、興味をそそられるということです。私は長文の授業資料を読むのが苦手で、なおかつ理解するまでに時間がかかってしまいます。ですが、藤山先生の作る授業資料はとても分かりやすく、もっと知りたいと思えるような授業資料でした。特に、「自己の確立」はとてもためになり、学べて良かったと思えました。今、私は青年期後期という現実を目を向けはじめ、自分を客観的に見つめるようになる段階に足を踏み入れている。こういった知識を得られたことにより、行動や考えが大人になったなと感じる場面があり、自分自身の成長を感じられて嬉しくなりました。私は将来、看護師・助産師になることが目標です。いつか、この授業で得られた知識をいかせられたらと願っています。

これからの人生、「使命」に生きるということを頭に入れ、いかに意義ある人生を送れるか精進していきたいと思います。対面で学べなかったことは残念ですが、ありがとうございました。

課題の解答から、受講生の学生はどう生きれば良いのかと問い、人生の意味を求めていると改めて知ることができた。現代社会に順応し、今を少しでも快適に生きられればそれで良いとするのが、近頃の学生気質であると思わされていた。しかし、実際に、どのように考えたら良いのか分からず、問うことをしないでいるのが実態ではないかと知ることができたように思っている。

コロナ禍という状況が、学生に生きる意義について問うことを余儀なくさせるように働き、「キリスト教の精神と文化Ⅰ」の授業に関心を示し、前向きに取り組むこととなったのであろう。また、「キリスト教の精神と文化Ⅰ」のコロナ禍におけるオンライン授業が課題研究型授業であったことにより、課題に答えるために授業資料を読み込み、考えることをせざるを得なかったということがあったからでもあろう。受講生の大半の学生に生きる意義を求めている姿勢を読み取ることができた。そのような学生の姿勢に向き合えたことを、コロナ禍におけるオンライン授業を担当した者として感謝している。

#### 参考文献

- C.S.ルイス著『キリスト教の精髄』新教出版社 1977年  
まど・みちお著『いわずにおれない』集英社be文庫 2005年  
トマス・ネーゲル著『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房 2006年  
V.E.フランクル著『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993年  
矢内原忠雄著『キリスト教入門』角川選書3 1968年  
佐藤敏夫著『キリスト教信仰概説』ヨルダン社 1992年  
F・A・シェーファー著『それでは如何に生きるべきか』いのちのことば社 1979年  
『鼎談 現代のアレオパゴス』森有正, 古屋安雄, 加藤常昭 日本基督教団出版会 1973年  
藤山 修著『イエスとの実存的出会い』教文館 2015年  
※その他の文献は本文中に掲載されている。

### Practical Example of Online Class during Corona (Covid-19) Pandemic “Christian Spirit and Culture I (Class by Fujiyama)”

Osamu Fujiyama

It was decided to conduct all the classes online at our university during the first term this year in response to the spread of new coronavirus. “Christian Spirit and Culture I” was also delivered online as a task-oriented research form, utilizing IC-UNIPA.

“Christian Spirit and Culture I” is an omnibus-style course by 5 teachers, 3 hours per each. We discuss and adjust each session beforehand, in order for us to cover different subjects.

My class intended to help students to form outlook on their own lives by discussing Christian lives based on Christian worldview. We discuss how adolescent students could tackle their issues based on a Christian perspective, specifically focusing on adolescent issues, which are problems of self-establishment, sociability and self-actualization.

The class materials were documented and sent out online to students and they have read through the documents, worked on answering the tasks to complete the class.

Responding to the situation of this coronavirus pandemic, it was the practical example of “Christian Spirit and Culture I” Online Class by Osamu Fujiyama.